

「甘美なるイタリア・バロック」を聴く 2017年10月31日 虎長



無償配布のコンサート月刊情報誌「ぶらあぼ」を読み、手の届く価格で興味あるものがないか探すのは楽しみの一つ。その10月号で見つけた、「バッハ・ヘンデル・ヴィヴァルディへの道」との副題に惹かれ、10月28日に聴きに行った。会場が戸塚駅直結で近距離のさくらプラザホールであることも足を向かせた理由のひとつ。

二つのアンサンブルの合同である。フランスが本拠のレ・タンブルは、川久保洋子(b-vn) Myriam Rignol (gm, フランス人) Julien Wolfs(cm・or ベルギー人) 日本が本拠のハルモニア・レニスは水内謙一(re) 村上暁美(cm・or) から成る。

でかける前に、楽器の略記の意味を考えた。b-vnがバロック・ヴァイオリンでreがリコーダー、orがオルガンということはすぐ分かった。cmはorと併記してあることからチェンバロと推測できる。

gmが即座に分からなかった、ヴィオラ・ダ・ガンバという名前は知っていたが、単にガンバということもあるとは知らなかったから。ガンバはイタリア語で脚のことで、脚に挟んで弾くから、この名がある。「弓をアンダーハンドで持つことが、オーバーハンドで持つチェロと異なる」ということを今回のコンサートで初めて知った。現物は、上のチラシの写真左手の通りだが、コンサートではもう一つのヴィオラ・ダ・ガンバも使われた。小さいのでヴィオラかと最初は思ったが、やはり脚に挟んで弾く。演奏後、ねかせて置いたのを横から見たら、筐体がとても厚く、ヴィオラとは異なることがよく分かった。

バロック・ヴァイオリンは、「弦が羊の腸(ガット)、弓は馬の尻尾、近代の演奏のようにヴィヴラートをかけない」という予備知識はあり、コンサート後、舞台上に上がって楽器の説明を受けたとき、「それ以外の違いは？」と質問したら、「ありません。ガット弦の方が、筐体からの響きがよいです。」とのこと。

リコーダーは、「小中学校の音楽教育のとは音色が違うなあ」と演奏中は感じたが、楽器説明の際、身近で拭いてもらったら、学校で使うのと同じに聞こえた。ソプラノ・アルト・テノールの三種が使い分けられたが、ルネサンス式リコーダーといわれ、初期バロック時代のものは残っておらず、当時の文献をもとに作られたものという。ソプラノでは、もう一つのものがあるので、違いを質問すると、「こちらは、指穴のあけ方が違います。初期バロック様式で、このタイプは博物館に現物が残っています。」との答えが返ってきた。チラシの写真に写っているのはテノールと2本のソプラノ。

使われたオルガンは小学校の教室にあったものと大きさは近いが、形は下の写真（今回のものではない）のものに近い。

チェンバロは、この日のコンサートでは2台置かれ、時には1台のみ、時には2台とも使われた。2台とも使うのは、レ・タンブルとハルモニア・レニス合同演奏の特色であるとのこと。いずれも一段鍵盤の質素なもので形は下の写真（今回のものではない）のものに近い。小さいほうが古い形で、時代と共に大型化・二段鍵盤化していったという。



ロジャース・クラシック・オルガン 538M ライトオーク調仕上げ



楽器の話が長くなってしまった。演奏された曲の方に移ろう。

知らない曲ばかりかと思っていたが、第1曲は聞き覚えがある。モンテヴェルディのオペラ「オルフェオ」のトッカータで、入場行進に使われることがある。作曲者はいずれも17世紀前半に活動した人達。作曲者名で知っているのはモンテヴェルディとガブリエーリだけだった。

本コンサートでは、14人の作曲家各人による1~4曲が演奏された。いずれも、たとえソナタとかシンフォニアと名付けられたものでも、短いものである。すべての曲の感想を書くと長くなるので、印象に残ったいくつかについて書く。

グエッリエーリ作曲 「3声のソナタ『ラ・ヴィヴィアーニ』」：後期バロックに通じるものを感じた。

メールラ作曲 カンツーナ「ラ・カッターリーナ」：リコーダーが2階左袖、ヴァイオリンが2階右袖に上がっていった。舞台に残った奏者との掛け合いが面白い。オペラ「ラインの黄金」の出だしや、「アイーダ」の凱旋の行進で、喇叭手が、この場所に立つことも思い出した。ヴェニスサン・マルコ寺院では、合唱隊がこの位置に陣取ってステレオ効果を狙う、という。「教会と室内用のカンツォーニ・サオナテ集」からの曲とあり、教会の音響効果を狙ったのだろう。

ファルコニエーリ作曲 「フォリアス」：フォリアといえば、後のコレッリの「ラ・フォリア」がとびぬけて有名だが、これに似ている。フォリアはイベリア半島由来の舞曲の一種だから似ているのは当然なのか、コレッリがファルコニエーリに影響を受けたのか、いずれだろうか。

ガブリエーリ作曲 「カンツォン」：バッハの「イタリア協奏曲」の出だしに、よく似ている。バッハが影響を受けたのは間違いないと思う。

リッチョ作曲 「エコーによる2声のカンツォン」：舞台裏から、演奏のエコーが聞こえてくる。オペラ「椿姫」で、室内で歌うヴィオレッタに、アルフレードの歌声が聞こえてくるように、とでも言ったらよいだろうか。演奏後、エコーの種明かしがあった。舞台裏で、リコーダーの低音でオルガンを、小さなヴァイオラ・ダ・ガンバの高音でヴァイオリンをシミュレートした、という訳だ。

ファルコニエーリ作曲 「悪魔のダンス」：アンコール曲。諧謔的で、最も退屈しない曲だった。

まとめ： 事前に明示されていた作曲家名はファルコニエーリとカステッロだけで、いずれも日本では有名ではない。前期バロックというと、「地味・退屈」との先入観からか、会場の客の数はホール席数の1/3程度だったのが寂しい。しかし世界を演奏して回るアンサンブルの協演とあって、さすが立派な演奏で感銘を受けた。舞台へ観客を上げて行った楽器の説明もサービス精神満点だった。大管弦楽団のコンサートでなく、今回のコンサートや室内楽にも興味を抱くようになったのは、僕が年をとったせいかな。

以上